

まぶしい光と力

辻 憲男（文学部教授）

「彼は規則どおり、胸を張り、姿勢を正し、できるだけ大きな声で駅名を称呼した。『次は、敦盛塚、敦盛塚でございます』。清作は、その称呼を、車のなかほどへ行って、再び繰り返した。そうするのが、規則だったからである。それから車の動揺によるめきながら、物売りのように、呼び歩くのである。『切符の切らない方は、ございませんか。…切符のない方は、ございませんか』。仕事に精一杯精励した。だが自分が鶏でいま鳴いて時を告げているような、本当の自分ではないことをしているような気がした。勤め帰りに立ち寄る呑み屋で、「私の心に痛切にうかんで来るのは、美しい女への思いだった。このようなおかしい自分から救い出してくれる美しい女だった。しかし私は、私の美しい女が、どんな顔をしどんな姿をしているのか、さっぱりわからなかったのである。ただ、美しい女への思いがうかぶと、私の心のなかに、何かまぶしい光と力にみたされることだけは事実だった」。…椎名麟三の二つの小説、『自由の彼方で』と『美しい女』をつないでみた。昭和初期の山陽電車(旧・宇治川電気)、敦盛塚は今の須磨浦公園である。終点は路面の兵庫駅前で、西代に乗務員詰所があった。

作家自身は姫路市書写の生まれ、17歳で車掌見習いになった。労働組合運動をして投獄され、職を転々としながら、自由、実存、ドストエフスキー、キリスト教と思想遍歴を経た。労働者の暗く苦しい生活と言っても、もはや過去の語り草になったが、上の一節など、今はかえって非凡なりアリティが感じられる。



東須磨駅以東は今は地下線。
小説では「美しい女」は観念の中にしか現れない。